

董事長とはじめて会ったのはわたしの母校でした。優しくおもしろい人、そして尊敬できる年長者。それが董事長に対する第一印象でした。



二度目は、合璧公司に入社した初日、董事長の事務所でです。見た目には優しく、成功者特有の風格を備えた姿は以前と同じでしたが、そのときふと思ったのです。ほかの企業家とどこか違うような気がする。

後になって、わたしは董事長の教えのひとつひとつ、数々の行事（音楽鑑賞会、セミナー、海や山への旅行、ジョギング、バイオリンやハーモニカの演奏など）、海外見聞のお話、善意の行動（袁英さんの救助、陳燕さんのおとうさんへの援助など）を通して、その違いがだんだんわかってきたような気がします。董事長は企業家としての成功者に留まらず、みんなのことを思いやる家長のような存在だったのです。

さらに時を経て、わたしは董事長のことがもっとよくわかったような、それでいてやはりわからないような不思議な気持ちになりました。そんな中、董事長はいつも知らないうちにわたしを励まし、ほかでは見られない手本を示し、考え方を少し変えれば思わぬ喜びが得られること、つまり仕事の中に芸術を楽しむことを教えてくれました。

電話はひとつの道具ですが、董事長はそこにある芸術、つまり電話の応対が大切なことを教えてくれました。ある日、董事長から「電話は会社の何を伝えることができるか」と聞かれました。わたしは答えに困りました。そんなことは考えたことがなかったからです。しばらくして「会社の理念とイメージ」と答えました。これに対して董事長の答えは「心」でした。わたしはなるほどと思いました。確かに電話は相手に誠意を伝え、真心を感じることもできます。突き詰めれば、これはコミュニケーションによる一種の芸術ともいえるからです。また、去年黄山に登ったとき、董事長は道連れの人たちと親しくなり、笑いながら楽しいときを過ごしました。これも一種の芸術といえるのかもしれない。

事務所にたくさんのお盆栽がありますが、ここにも芸術があります。董事長は「花に委ねられ土をやり、盆栽を切りそろえる」という小さなことにまで心を込めます。こうやってわたしたちに「小さなことでもやれば違いが出る。それが進歩で、ほかとは違うものになる」とことを教えてくれます。わたしは回りの環境を少しずつでもよくして、平凡な生活の中にも素晴らしい人生を感じたいと思います。これこそ芸術の人生です。



上海合輝品管課同仁 耿偉娟

些細な出来事

彼女の背はそれほど高くない。それでも大きな責任を背負って。彼女は中肉中背だ。それでもその広い肩でみんなに降り注ぐ雨を避けてくれる。彼女は仕事におけるリーダー、生活の中のエンジェル。

彼女はだれに対しても温和で、大声で話すことはない。彼女はみんなを我が子のように可愛がる。彼女はいつも和やかに話し、微笑みを絶やさない。どこへ行っても、みんなは彼女のことを「章おかあさん」と呼ぶ。彼女について、わたしは噂にしか聞いたことがなかった。でも、ある日実際に会うことがあった。そして思った。彼女は章おかあさんと呼ばれるにふさわしい人だ。

そのとき材料が足りませんでした。わたしは息を切らして担当の部署へ行くと一気に怒りを発散させました。「どうしていつも材料が足りないの？あなただのこの検査員はちゃんと検査してるの？それともわたしたちに製品を作らせないつもり？」。それを聞いた彼女は「それはいつものこと？とにかく、すぐに調達するから。それに検査員にもいっとくから」と穏やかな声でいきました。そのとき、わたしは何故か「こっちは悪いんだけどね。ちゃんと確認しなかったし」といっていました。すると、彼女は手元の材料を全部検査するよう部下に告げました。

十分後、再び戻ってみると、彼女が材料を作っていました。それはわたしが必要だった材料です。彼女は真剣な表情でした。検査員の責任を自ら取るようになっていました。彼女は組長なのに。このときふと、ある従業員のことばが浮かびました。「わたしたちの章おかあさんは素晴らしい人よ」。そして、どうして彼女が「章おかあさん」と呼ばれるかわかったのです。

ここではみんな知っています。「章おかあさん」はだれなのか。彼女はみんなから尊敬されています。彼女は章平燕組長です。上海合璧製造課班長 李盼盼

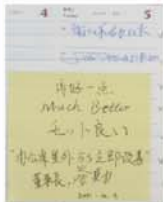
特別な励まし

子供の頃は一個の胎でうれしくなって、笑顔がこぼれたものです。学校が上がってからは、先生の励まし、宿題ノートに書かれた大きな「優」の字が何よりの喜びでした。しかし、働きはじめたあと、この「優」はいつしか遠く遠いものになってしまいました。「優」を望まなければがっかりもしない。そう思っていました。心の中ではやはり「優」がほしかったのです。

清明節明けの最初の出勤日、いつものようにノートを開くと、そこには何行かの青や黒のペンで書かれた大きな文字がありました。よく見ると励ましのことばです。そして、その後には董事長のサインと4月5日午前4時半という時間。董事長がこれを書いたとき、わたしは何をしていたのか。そう思いながら青と黒の文字を見ると、感動と尊敬の気持ちが湧き上がってきました。董事長のような年長者が清明節の日に事務所に来てみんなのノートに励ましのことばを書いていたとは……。こんな特別な「優」をももらったわたしは本当に感動と尊敬を覚えました。そしてこれからは仕事を一層頑張ろうという気持ちになりました。おそらくほかの同僚も同じ気持ちだと思います。

わたしが尊敬する董事長はいつも知らぬ間にわたしたちを励まし、向上心を与えてくれます。とても素晴らしい経営者であるとともに、人生の知恵者でもあると思います。

上海合輝金型課同仁 劉青山



合璧流

不断地思考與行動 誠信規變創新卓越 創造價值共生共榮 感謝報恩回饋社會

2011/09 第10期 09月10日發行

出版社：合璧文化基金會 發行人：詹其力 編輯指導：陳慶煜、詹杰文 總編：王迎春、林生富 編輯委員：劉珊、李高燕 印刷：上海絲禾印刷有限公司

石碑の情 ~ 偉大で忘れ難い恩師

石碑はもともと静物だが、そこに文字が刻まれると情が生まれる。思源河の畔にはさまざまな形の石碑があります。これらはすべて芸術品ではありませんが、ここにはどんな宝石よりも貴重なもの、我が社の理念を見ることが出来ます。

我が社の経営理念は「感謝報恩、回饋社会（感謝の心と社会への還元）」です。ひと口に感謝の心と社会への還元といっても、その方法はさまざまです。ここでは石碑に刻まれた董事長の恩師に対する気持ちをご紹介したいと思います。



一日彩工人となれば 生涯彩工への情をわ

国立彰化師大附屬高工歴代校長記念碑

- 日本統治時代の校長
初代：阪本嘉章先生 西曆1938~1939
二代目：川島一先生 西曆1939~1945
台湾復興後の校長
初代：吳鑑湖先生 西曆1946~1970
二代目：袁立鑑先生 西曆1970~1980
三代目：林克禮先生 西曆1980~1990
四代目：胡正華先生 西曆1990~1999
五代目：鍾瑞蘭博士 西曆1999~2002
六代目：劉豐旗先生 西曆2002~2006
七代目：黃榮文先生 西曆2006~2010
八代目：蕭瑛琪博士 西曆2010~

利益の創造は企業経営過程
「價值創造、共生共榮、感謝と恩返し、社會への還元」、これこそわたしたちの最終目標。
西元1958年畢業生。



石碑には「1958年卒業生」と刻まれています。これを見たとき、深い尊敬の念に駆られることでしょう。なぜなら、1958年の卒業から2011年の今日に至るまで、母校を巣立って53年の間、董事長は母校に対する感謝の気持ちを常に持ち続けていたことがわかるからです。恩師から学んだ知識や知恵に対して、董事長はその恩を忘れることはありませんでした。そればかりか、それを何倍にもして恩返ししています。例えば、85歳になる小学校時代の恩師を日本の温泉に招待し、その背中を自ら流したことがあります。そのとき、恩師は何を思ったのでしょうか。光榮、誇り、感謝、激情……。その目に涙があつたのかもしれない。そしてその向こうに小学生時代の董事長を見たのかもしれない。

石碑には彰化高工の歴代校長の名前が刻まれています。その中には董事長に連れられて上海合璧の工場に来られ、石碑の題字を書いたり記念の植樹をした方も数人います。そのとき、彼らは企業家として成功を取った、自分の学校の卒業生の姿を見て言葉では表せない満足感を覚えたことでしょう。

ここで少しわたしの考えをお話します。わたしは感謝を表す気持ちとしてどれだけ大きなことをしたかは重要ではないと思っています。多くの人が董事長のように恩師を海外へ連れて行くことなどできません。それでも、そんな中で自分のできること、身近にある小さなことをしていくことが大事だと思います。そうすれば、わたしたち自身も成長するでしょう。董事長はよく「感謝は人を成長させ、恩返しは人に達成感を与える」といいますが、董事長の今日の成功もこうした感謝と恩返しの積み重ねによるものだと思うからです。

さて、世界には星の数ほどの企業があります。しかし、その中でどれだけの創始者が自分の母校の歴代校長の名前を美しい川辺に立つ石碑に刻んだでしょうか。こんなに思いやりのある行動で中国、さらには世界に影響を与えたでしょうか。母校の校長や先生、卒業生を海外へ招待したでしょうか。母校や先生のために財力支援をしたでしょうか。わたしは董事長のほかにはいないと思います。

偉大ですが、感謝についてのわたしの考えをここに述べさせていただきます。感謝とは修練、毎日の生活の中でゆっくりと重ねていくもの。感謝とは美德、毎日の生活の中で味わっていくもの。感謝とは永遠の支点、毎日の生活の中で自己を実現していくもの。感謝が与える生命とは、動かない石碑。石碑は証明する。偉大で忘れ難い恩師。

「偉大で忘れ難い恩師」はわたしたちに生活の些細なことに対する感謝を勧め、生活の中に一筋の光を与える。上海合璧 總務 李高燕特助

